

# 最悪を想定なのに楽観的

岸田文雄首相が十五日、新型コロナウイルス対策の専門会議を開いた。最悪の事態を想定し、今夏の流行「第五波」に比べ、「感染力が二倍になつても対応可能な対策を策定する」と強調。一方で、ワクチン接種の効果を前提としたシナリオには「甘い見通しほ」との懸念もつきあつた。医療現場や自治体の担当者には困惑が広がる。

## 首相「2倍の感染力 病床は2割増」

### ■ 安心感

「今後の感染拡大の可能性に備え、対策に万全を期していく」。首相は十五日の感染症対策本部会合で、医療体制の整備を急ぐよう関係閣僚に指示した。

就任から十日余り、衆院選が事実上始まったタイミングで首相が骨格の公表を急いだ背景には、有権者の不安を払拭し支持を得たいとの思惑がある。官邸筋は、「病床を確保します」だけでは国民に分かりづらい。なるべく具体的な数字で示すことで安心感を高めてもいい」と明かす。

骨格では、入院患者の受け入れ病床を「割増やすほか、補助金をもういながら患者を受け入れなかつた「幽霊病床」を改善し、病

床の稼働率を八割以上に引き上げると明記。自宅療養中の死亡が相次いで反省も踏まえ、保健所と地域の医療機関が連携し、全ての陽性者が判明翌日までに健診観察や診療を受かりれるようにするとした。

### ■ カラクリ

感染力が第五波の二倍になつた場合に、なぜ病床は

「一割増で足りるのか」。対策の基となる試算には、ある「かいつり」がある。

政府は「六十五歳未満の若年層のワクチン一回目接種率が70%に上がれば、全体の感染者は半減する」と仮定。新たな変異株の出現など「感染力が二倍になつたとしても、感染者数は結局、今夏と同水準にとどまる」と風込んでいる。



### ■ 疑問視

第五波の感染者は急速に減少したが、ワクチン以外にも複数の要因が指摘されており、政府の仮定を疑問視する専門家もいる。

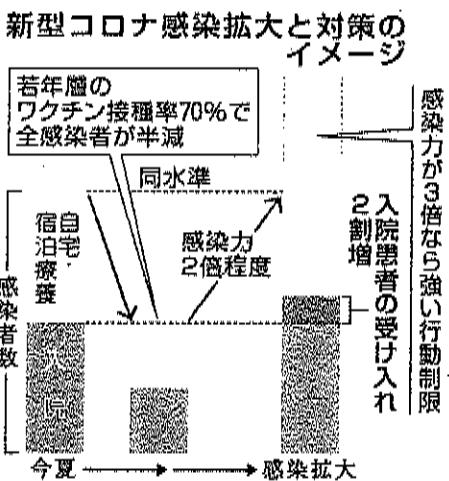
重症者治療に当たる近畿

大病院（大阪府大阪狭山市）の森田有智病院長は、

「コロナ禍で病院のベッドを増やさなければいけないのに削減するという支離滅裂な政策を進めてきた。

「こんなばかげた」とはもつ

てひれに下がる。それをしてやめませんか」



加味した分析なのか」と面をかしげる。接種で重症化を抑えられても、ウイルスの姿勢でワクチンの効果が低下する可能性も。欧米では接種後の「フレーキスルー感染」も報告されており、「これから先は未知の世界。簡単に考えないで」といふを勧す。

## ワクチン過信／未知の変異考えず